

少しく燥急な普遍化をやつては居らないか。然しながら、彼れの観察は實に手に入つた、實に確かなものであつてみれば、さうした缺點がたとひ如何に多くあらうとも、決してがやく／＼云はれるほど重大なものではない。そして、若しもこれを機會ある度毎に訂正するならば、尙ほ更ら科學のために有益となるではないか。

分類上の若干の誤謬——彼れのスカラベ・サクレは、それが兄弟の様に似てゐるスカラベウス・ピウス (Scarabaeus pius) に過ぎず、また彼れの黄翅のあな蜂は事實に於てスフェックス・マクシロス (Sphex maxillosus) であるにしても、それにどれほどの重大さがあるか！

また、不思議が時として彼れの想像したほど驚歎すべきものでないにしても——例へばあな蜂類の奇蹟的な本能とせられたものも、事實に於て兩敵手の間に於ける争闘の機械的事情、大きな相違、及び勝利者の角性の甲冑と犠牲の神経系統とが、旨く侵し侵されるやうに出来てゐることなどの結果に過ぎないにしても、それが何んだ！ 不思議が不思議でなくなるか。

更に或る者は、「自分等と異なる意見を發表した」と云ふので彼れを非難した。本當を云へば、彼れは信心深い人達の中に、疑ひの眼を以つて見られてゐた。それが若し宗教裁判の當時だつたなら、

彼れは必ずや異端呼ばはりをされたことであらう。さうかと思ふと彼れはまた、宗教を信じない人によつても憎まれてゐた。彼れの高遠な精神主義が、彼等の氣に喰はなかつたのだ。恐らくこんな譯から、やがてファブルをやんやと賞讃する小學教員等さへも、當時多くは彼れを無視したのであらう。

實際ベルグソンの如く、ファブルに負ふてゐる所のものを知つてゐた人は、極めて稀だつた。ベルグソンは私へその感歎を洩して云つた。「ファブルを知つてゐるものは無い！ 何しろ世間ではやつと彼れを解し出した——やつと彼れを讀んでみようかと云ふ氣になり出したのだからね。」

それからアヴェバリー卿は、英國の底から喝采してゐた。その他、著名の數學者アンリ・ポアンカレ (Henri Poincaré)、大礦物學者ラクロア (Lacroix)、高潔な昆蟲學者ブヴィエ (Bouvier)、科學者ポール・マルシャル (Paul Marchal) なども讚歎してゐた。然しながら、凡てのうちで最も情熱的なのは、ロスタン、ロマン・ロラン、メエテルリンク等であつた。

註一 Edmond Rostand 一九〇九年、十一月二十日、私への手紙。

「アンリ・ファブルを祝はうとする人々の間へ、あなたが私をも入れて下されたことに就いて、私はひ

どく感動するばかりでなく、それよりも、特に、非常に嬉しく思ひます。あなたの御盡力に對して私の名も何にかの役に立つたらうとお考へ下されたことを、深く感謝致します。「昆蟲記」は久しい前から私を此の感激に富んだ、深い、麗はしい天才に親しませて參りました。私は得も云はれない無数の時間を此の著作に負ふて居ります。私の一人の子息が、今進んでゐる方面を取るやうになつたのも、恐らく此の著作の御蔭であります。アンリ・ファブルへ敬意を表するために、幾多の歲月以來、その生命を著作の中に閉ぢ込めてゐる彼の勤勉な退隱を、あなたは少時の間攪亂する敬虔な危険を冒すことになるにしても、それは哲人のやうに考へ、藝術家のやうに見、詩人のやうに感じ且つ表現する所の、此の偉大な科學者に對する天晴れな正義の行爲であります。」

註二 Romain Rolland 一九一〇年、一月七日、私への手紙。

「ジャン・アンリ・ファブル頌讚に参加せよとの仰せに私は何んとも申しやうのない悦びを感じます。彼れは私の最も讚美する一人であります。彼れの非凡な觀察の情熱的忍耐は、藝術と同じやうに私を恍惚とさせます。既に幾年以來、私は彼れの著作を読み、且つ愛して居ります。最近の休暇にも、私が旅へ持つて行つた三冊の本のうちで、二冊は彼れの「昆蟲記」でありました。私もあなた方の一人として戴けるならば、寔に有難い仕合せであります。」

註三 Maurice Maeterlinck より一九〇九年、十一月十七日、私への手紙。

「アンリ・ファブルの目を祝はうとする委員の間に、私の名を書き入れて下されたことを私は非常に嬉しく、且つ非常に光榮に存じます——實際、アンリ・ファブルは、今日文明世界が持つてゐる最高至純

の光榮の一、最も優秀な博物學者の一人、近代的意味の、最も靈妙なる眞の詩人であります。斯く、私が生涯の最も深い讚美の一つを云ひ表はす機會を下されたことが、どれだけ私を嬉しく思はせましたことか。」

時機が將に去らうとしてゐた。も少し経つと、彼れの美しい言葉の通り、「ヴァイオロンの來方が遅過ぎたであらう。」 老大家は日増しに衰退してゐる。嘗てはあんなにも鋭かつた彼れの眼も、今は殆んど署名することさへ不可能で、その細かい文字が顫へ、こんぐらかり、分らないものとなつたほど曇つて了つた。彼れの筋肉は甚だ衰へて、もう夫人の腕に倚り、杖に身を靠せて、ほんに小さく刻んで歩くだけである。それにしても近かくに助けの腰掛でも無いならば、彼れは直き痛ましくも倒れて了ふのである。此のアルマ——彼れが三十年來毎日踏んで來た此のアルマを一週するとは、もう間もなく覺束なからう。斯うした全身の衰退の中にあつて、たゞ彼れの輝く二つの瞳孔と、彼れの異常な記憶とのみは、尙ほ生き／＼としてゐる。

それにしても、彼れはたゞ無限の倦怠を感じてゐるだけで、少しも悲哀に沈んでゐはしない。そして「昆蟲記」を彼れが欲した點まで突き進めて行かない限り、——此の世の光明が突如として彼れを去り、彼れの眼が永遠の生命に開かれるその瞬間までは、いつかな死なうとは思はない。

祝典は一九一〇年四月三日に行はれた。それは靜思の空氣と單純さによつて、實に感慨深いものだつた。

フアブルの生涯に於て、何んと云ふ類ひなき日であつたか！

その朝、アルマの門は凡ての人に開かれた。そして屋敷へ襲ひ入つたセリニヤン衆の多くのものは、久しい間彼等の同郷人となつてゐる此の人を始めて發見し、始めてその顔を見て驚いた。

然しながら、凡ゆる方面から此の桃色の家の前に慕ひ集まつた崇拜者の群れの中で、最も驚いたのは、それはハンブルなものの中でもハンブルな盲目の指物師、マリユスだつた。彼れは彼れが愛慕する人のために斯くも突然撒かれた多くの讚辭を聞いて、胸中を揺がす激しい歡喜を抑へることが出来なかつた。それほど斯うした禮讚の日が、彼れに取つては曾つて輝かうとは思はれなかつたのだ！

祝典の日はすつと前から取り決められてゐたにも拘はらず、一として不安でないものは無かつた。第一、此の祝ひの式に参加することになつてゐた名士の間には、先きの意見が變はりかけてゐた。

そして此の科學者の祝典に、科學者のやつて來たものは殆んどなかつた。

それにしても、彼等は王侯の凡ゆる豪華を以つて祝された、より盛大な他の祝典の壯麗に心を惹かれて、極めて近く、地中海岸の一點に多勢集つてゐたのだ。即ち此の瞬間に科學界の一部が異様な對照をなして、モナコ王が巨萬の資を投じて設立した海洋生物館の開館式に伴ふ美々しい光景を味はうために、あの南方へ移つてゐたのである。それは「吾々の大西洋岸や地中海岸に、幾多の實驗場が大費用をかけて建設せられ、小さい海の生き物は解剖せられ、強度の顯微鏡や、繊巧な解剖器や、捕獲器や、船や、漁夫や、養魚器などに惜し氣もなく金をかけられ、」そしてフアブルが何處かで熱烈な言葉を以つて、生命の深い研究のためには必ずしも必要でないと言つてゐる所の、さうした研究所の白眉とも云ふべきものなのだ！

フランスの科學者たちは、歐米の多數のアカデミイの代表者等と共に、海祭りの亂舞がサン・サ

エンの刺戟の強い音楽と交替するさうした崇拜氣分に現を抜かして、最早たゞの一分たりとも彼等の眼を此の「光明の君」、此の「有徳の君」、此の「有用の君」から外らすことは出来ず、そしてそのまま、巴里上りの途に就いて、彼等の大部分はオランダユとみすぼらしいセリニヤンの村をば顧みなかつた。

それに、天氣も此の季節としては甚だしく悪かつた。此の春は始めから洪水や、その他色々の惨害に満ちてゐた。そして巴里では、世も終りかと思はれたほど雨が降つた。

それにしても幾日かの雨が此の日降り止んだ。そして突如として太陽が輝いた。

多くの讃辭の間に、金の記念章が老人に捧呈された。それには卓越せる彫刻家シカアル (Sicard) に依つて、一面に彼れの特徴が稀れに見る忠實さを以つて彫りつけられてゐた。その裏には美術史にも稀れな美しい綜合の裡に、科學者と昆蟲の詩人と、同時に、闇の底から多くの小さい生命が忽然と現示せられた景色と、太陽を浴びたヴァントウ山に面して橄欖樹に取り巻かれた奇蹟的な村とが、巧みに掴まれて驚くべき寓意に輝いてゐた。

ストックホルムの科學院は、此の機會に彼れに最高の表彰を呈した。そのリンネのメダルを私が捧呈する光榮を持つた。

俄か拵への祝宴が、セリニヤンのカフェで張られた。それは恐らく斯うした田舎の慎ましやかな生活の中では、光榮さへが慎ましやかにせられるためであらう。

ファブルは歩くことが出来なかつたので、オランダユからわざ／＼やつて來た盛裝の馬車へ、手傳つて乗せられなければならなかつた。そして小さい行列はマリユスに元氣づけられた村の音楽隊と共に、一本街を揚々と練つて行つた。

それは家族の一大饗宴——凡てが同じ思ひに溶け合ふあの愛餐のやうなものだつた。

エドモン・ペリエ (Edmond Perrier) は此の老博物學者へ學士院團の讃辭を齎らした。彼れは飾りの無い言葉を以つて、彼れ自らの正しい感歎を巧みに云ひ表はした。そしてファブルの全經歷と、その不朽の著作との要領を語つたのは、一層博物學者を頌讚するに適したものだつた。

勞苦の過去を呼び起こす之れ等の言葉に、ファブルはその果敢なくも消え去つた悦び、彼れの生涯の幸ひなりし唯一の數分」をそゞろに懐かしんだ。そして自らの想ひ出と、今斯うして彼れの天

才に献げられる單純な、敬虔な讃辭とに感極まつて、彼れは潜然として泣いた。多くの人々も、彼れの泣くのを見て涙を流した。

無名の大衆の名を以つて——彼れの著作の中に無限の愉悅を見出した凡ての人達の名を以つて、讃辭を述べた人もある。また偉大なる文學者、偉大なる詩人から、此の日此の時、此の「昆蟲のヴイルデイル」へ——「野の蟲けらの言葉を知つてゐる此の優しい道士」へ、彼等の敬意、彼等の雄辯な言葉を贈つて來た。

註一 エドモン・ロスタン。

「事情に妨げられて、遺憾ながら私は参加することが出来ません。然しながら私の眞心は、この感歎すべき人を、このフランスの至純な光榮の一つを、私とその著作を讚美して止まない此の偉大な科學者を、香り高く意味深い此の詩人を、吾々をして草の中に跪ぶさせた此の昆蟲のヴイルデイルを、叡智の最もよき實例を示した此の隱者を、セリニヤンをメエヤヌの對とした、此の黒のフェルト帽を被つた高貴な人物を、今日其處で祝ふて居られる皆様と共にあります。」

此處で私が云つて置くべきことは、即ち、エドモン・ロスタンは常にフアブルの崇拜者の一人、特にフアブルの逆境の友であつて、機會ある毎に、必ず配慮と心からの感歎を表明して來たと云ふことである。

註二 ロマン・ロラン。

それは實際、彼れは早晩十分に認められたことであらう。それにしても斯うした催しが無かつたならば、彼れの生涯の終りは確かに忘却の裡に過ぎて、殆んど注意を喚起することもなく、そのまま寂しく此の世を去つたであらう。そして村の墓地となつてゐる砂利地の中へ——彼れに先き立つた愛する者どもの待つてゐる墓所の中へ、葬ふ者もなく空しく去つたであらう。

然しながら、彼れに致された榮譽も、彼れが當然受くべき榮譽を去ること未だ遠いものだつた。教育界はフアブルがその光榮の一つだつたにも拘はらず、此の盛典に光彩を添へることをしなかつた。また政府が當時忙殺されてゐて、何人も期待してゐたやうに自發的にかうした記念すべき場合にふさはしい行動を執ることが出来なかつたのは、返へす／＼も遺憾である。デュリュイがフアブルを帝國のシュヴァリエ (Chevalier レゾオン・ドンヌウルを受けた人) となしてから、既に四十有餘年経つてゐる。而かも此の永い間に、何人も進んで當局に彼れを想起させ、彼れの價値を辯明し、彼れの功勞を立證し、以つて彼れのレゾオン・ドンヌウルを一級進ませようとした者はなかつたの

だ。それにしても、彼れは絶えず多くの卓越せる勤勞を以つて、此の勳章に一段の光彩を添へたではないか。

かうした遅播きの報償も、彼れの生涯の黄昏時を輝かせるだけの効果はあつた。何んとなれば、此の瞬間から突如として彼れの眞の姿が輝き、そして偉人の間にその席を取つたからである。

遂にファブルは名聲と光榮とを知つた。否、そればかりではない。衆望をも聚めた。それは當然だつた。彼れは本質に於て民衆の天才ではないか。彼れは永い生涯の間、生命の不思議を萬民の掌中に置くことに努めたではないか。彼れが著作をしたのは、特に平民の子供等のためではないか。かくして世人はアルマの道を知つた。今、人々は群れをなして、此のアルマと、此の慎ましかくな實驗室とを訪ねて来る——恰かも眞の順禮地へ、熱烈な信者が遠方から引きつけられて行くやうに……

つい此の間迄は、あんなにも多忙だつた彼れの生活は、今や大部分さうした訪問に満たされる。そして彼れに注がれる斯うした同情の温かさの中で、彼れの感ずるのは黄昏ではなくて、それは曙

である。恐らくまた斯うも感じたであらう——生涯の努力は無駄ではなかつた。自分の著作に依つて、多くの人々は植物や動物を一層愛しみの眼を以つて見るやうになるであらう。また、自分の著作へ漸く向けられた人々の考察も、これを忽ち汲み盡くすことは出来なからう——と。蓋し、彼れの著作は自然の聖書の一なのだ。

## 光榮の晒臺

彼れは國家の一大人物となりつゝあつた。今や彼れには財産も出來て來た。凡ての人は彼れを讀み出した。何人も彼れを知つてゐるやうに見せたがつた。そして「ファブルの日」が祝はれた年だけでも、「昆蟲記」が二十年間にぼつり／＼とはけたよりも多く賣れた。然しながら、彼れにはもう嚙む齒も、見る眼も、歩く脚もなくならうとしてゐた。そして彼れはもう仕事をすることは出來なくなつてゐた。

かうした人が何處かに居つたこと、斯うしたつゝましやかな博物學者が世界の大博物學者の間に伍する價値のあつたこと、彼れが小さな村の中で、荒漠たる自然に取り卷かれて、寔に驚嘆すべき觀察をなしてゐたこと、そして彼れがそれらの觀察を、正確と單純とのモデルとして、また事物から發出するあの自づからなる詩味の最高表現の一として、幾世紀の後までも残るやうな靈妙な文體

を以つて描いてゐたこと——それが凡て突然に分つたので、多くの人は少なからず驚いた。

彼れが文學のノベル賞金に對して推薦せられたのも、さうした理由によるものである。そして、恐らく審査員をして彼れにます／＼好意を懷かせようと云ふ目的からであらう、彼れを尙ほ以前のやうに貧しいと思ふてゐた人達は、彼れの過ぎ去つた貧困を誇張し出した。彼れは殆んど赤貧で、將に餓死せんとしてゐるもののやうに云はれさへもした。

かうした作り話は、ミストラルの響きのよい動議となつて現はれた。彼れは迂遠の靜謐の中に於て、かうした思ひ切つた噂を、彼れの光榮ある名前を以つて公證しなければならぬと考へたのだ。それが又ロスタンの堂々たる詩となつて表はれ、さうした噂に寛大な息を吹き込んだ。

フランスよ 莊嚴な鬨が或ひは崩れようとする時に

お前はスキーデンの爲種しごきに望みを置くか

お前はファブルの老衰を知らない筈はない

またお前が當然彼れに爲すべきことを爲さなかつたことをも

「昆蟲のファブル」——ロスタン

全世界は動かされた。限りなき憐愍の澎湃たる浪がセリニヤンに向つて押し寄せた。そして無数の施物が一と夏の間、此の覚えのない受取人を困惑せしめた。「老境にある自分にかうした途方もない事は止して貰ひたい、」そして最後の日を平穩の裡に了へさして貰ひたい——かう彼れは切願した。

註一 一九一二年、八月四日、マタン紙へ。ファブルから。

彼れがこんな風に公衆の前に晒され、そして彼れの貧困へこんなにも光彩を與へられたことを、如何に惱んだかは想像に餘りある。幾束もの爲替、否、物品さへがフランスの隅々から送られた。大金を呈供した未知の友さへもある。然しながら、彼れにとつて最も堪へ難いのは、もつとも不面目なのは、それは外國人の施物だつた。三フランの端た金が嘲笑の意味でプルシアの奥から彼れに送られた。そしてベルリンの一新聞は大膽にもかう書いた——「フランスが光榮の負債を拂はないならば、ドイツはこれを支拂ふ。」



物語にでもありさうな清廉さを以つて、ファブルは毎日々々さうした無数の手紙に答へ、さうした金を返送し、またさうした「意地穢い人いぢめ」に對して抗議を申し込んだ。無名の賜物はセリニヤンの貧民に分られた。

註一「吾々の敬愛するファブルは、彼れの許へ送られる金品を、一切寄贈者へ返送すると申しました。その結果、彼れに宛てて私へ送られた一千フラン近くの金を、私自身もそれ／＼發送者へ説明をつけて送り返へすために、随分多忙でした。」(ミストラルから私への手紙。一九一二年、七月三十一日)

無数の同情深い人の間には、人間性のどん底を此の場合にさらけ出した下劣な者もあつた。それがファブルをして、常に下等な蟲けらの間に悲しくも認められた所の、あゝした矛盾を感じしめた。即ち、何んともつかない動物が彼れの隠遁生活の只中へ幾つも立ち現はれて、圖々しくも彼れに勸むるに斯うした施物の山の尠くも一部を取つて置くべきであることを以つてした。その下心は實に奴等自身の必要を充たし、その包み隠くしてゐる貧困を密かに和らげようとするにあつたのだ。さ

うした動物の一は祕密を守つて貰ひたいと頼みながら、彼れに斯う云ふ手紙を送つてゐる——「法王を御覽なさい。彼れは凡ゆる志を受けて、それを世界の到る所に配るではありませんか！」

それにしても斯うした虚偽の力に驅られて、政府はいよ／＼彼れに補助金を給することに決定した。ファブルがそれを未だ給せられてゐなかつたと云ふことは、外國では奇怪に思はれた。それは二千フランだつた。二世紀以前レオニールが給せられた一萬二千リーヴルと較ぶれば、何んと云ふ吝な額であるか。而かもレオニールは大して必要に迫られてはゐなかつた。のみならず、科學者としてのファブルは、何も彼れに劣つてはゐないのだ。成程當時の彼れの物的位置は最早不安でなかつたにしても、實に長い間彼れはパンを得るために、その家族を養ふために、驚くべき激烈な仕事をしなければならなかつたではないか。而かもこれに依つて彼れの科學的探究が、どんなに打撃を蒙つたことか。されば尠くも二十年以前に於て、彼れが既に凡ゆる物質上の憂苦から解放せられなかつたことは、返へす／＼も遺憾なことである。

註一 ミストラルから私への手紙。

「終りのよいものは凡てよい。そして今、終りがよいのです。博物學の長老が、とうとう二千フランの補助金を給せられるではありませんか……」

註二 「フアブルに對して、國家から年金若しくは補助金を支出させることは出来ないのですか。生涯の偉業によつてフアブルは祖國の名譽となつてゐるではありませんか。ですから彼れの偉大な祖國は、あんなにも著名な、あんなにも清廉な、あんなにも高貴な科學者の老境を保證すべき義務がある様に私には思はれます。」 ストックホルムの科學院の幹事 Anri-villius より私への手紙。(一九一〇年、十月六日)

それにも拘はらず、彼れを繞つてあんなにも出鱈目に流布せられた作り話は、その結果、ますます彼れの人氣を増すことになつた。それを誰れよりも先きに彼れ自身が、その古いパイプの煙の輪に較べて笑つてゐた。

然しながら、さうした人氣も科學院の門戸を開くには至らなかつた。恰度その頃法令によつて、科學院内に新しい一部が増設せられ、その部員は全く通信員の間から選ばれた。それは地方に愛著して居りながら、屢々フランス科學の名聲に素晴らしい貢獻をした多くの科學者に對してなされた敬意であつた。ところでフアブルは、當時さうした科學者の最も代表的なものの中でも、第一位に

在つた。然しながら、「吾々と不斷に接觸して居つて、測り知ることの出来ない價値ある研究資料を一般心理學へ供給し、乃至は、吾々の收穫を荒らして國富を危險に曝す地上の小さい蟲けら」をば蔑すんで「アルコール漬けの」死んだ昆蟲へのみ注目する動物學者どもは、いやはや、實に巧妙に謀んで彼れを押し除けたのだ。

實際、三十年前を振り返へつても、彼れはフランス學士院團の綠衣を着け、羽飾りのついたシャツポを戴き、そして眞珠母の握りのついた劍を佩びたことはない。

然るにアルマを訪づれる者は、もう絶えることはなかつた。彼等は一人々々、若しくは小さい群れをなしてやつて來た。彼れは常に無限の好意を以つて彼等を迎へ、しんみりと會話をとり交はしては喜んだ。

それは實際、彼れを骨董品か何んかのやうに心得て、單に見に來た者もある。然しながら、さうした人々の間にさへも、歸つて行く時にその見たところのものに感激して、今までよりも多くのものを考へ、牧草地の花をよりいぢらしく思ひ、森や林に漂ふ野生の匂ひをよりしんみりと感じ、又

草木の緑もより柔いやうに思ふものもある。彼等は大地を見、「草の中に跪く」ことを學んだのだ。

幾多の科學者が、此の科學者と語りに来る。また或る者は、此の師範學校出、此の宗派に屬しない教員、此の偉大な教育家に敬意を表しに来る。彼れの光榮は凡ゆる小學校の光榮なのだ。

直接に訪問することの出来ない人々は、彼れに手紙を送つて、彼れに負ふところの凡ゆる愉悅を語り、彼れの物語を讀んで過した永い嬉しい時間を謝し、「昆蟲記」の續きを限りなく與へて貰ふために、何時までも健在ならんことを希望する。

或ひは彼れへ「昆蟲記」、若しくは哲學に關する多くの質問をかけるものもある。或ひは彼れが掲げた或る峻るやうな神祕な問題に就いて、不可能な解答を求めるものもある。さうかと思ふと、胸に蟠かまる切ない思ひを聽いて貰ふために、彼れの許にやつて来る婦人もある。これこそは純眞な頌徳とも云ふべきもので、他のいづれにも増して人の心を動かすものがある。それは一人ぼつちな寂しい人々にとつて、彼れの著作が何んと云ふ功德となつてゐたかを物語るものである。それはまた、靈妙な科學に巧みな通譯者の聲さへあるならば、それがどんな慰藉となることが出来るかを語るものである。

或る者などは、彼れにそのへぼ文章、へぼ詩を聽いて貰ひにやつて來た。そんな時には彼れは大して耳を傾けるでもなく、たゞ一刻も早く免れるために、「よし／＼」と云ふもののやうだつた。

黒のボヘミアン・ネクタイをつけ、窮屈な燕尾服にくるまつた、顔の蒼白いバレス (Barres) 流の耽美主義者などもやつて來て、神聖な靜寂の多産な靈感を云々したりした。

旅役者さへがプロヴァンスを打つて歩く序でにセリニヤンに乗り込んで、彼れに敬意を表さうと云ふつもりか、それとも彼れに褒められようと思ふつもりか、何んか有名な堂々たる詩を朗誦したりした。一度び靜寂の中に歸つてから、未だ／＼云ふ記憶の新しいうちに、その印象を訊ねられると、彼れは何が何んだか分からず、たゞ底の知れない退屈を感じたことを、きつぱりと云ふのであつた。

また、彼れがあんなにも永い間暗がりに放棄せられてゐたことを驚く人々に對しては、彼れはかう答へるのであつた。

「光榮のために働いたのではなく、たゞ／＼仕事が目白くて働いたのだから、わしが顧みられな

つたからと云つて、あなたは憤りなさるが、わしは別に何んとも思ふてゐない。」

然しながら、群集が屢々遠慮會釋もなく彼れの住居を襲ひ、花壇を踏み蹂り、緑の灌木へ傷をつけ、此の聖地に於いて不謹慎な、劣等な振舞をしたには、彼れは何よりも不快に思ふてゐた。既に「ファブルの日」の祝ひの時に、ミストラルが彼れのためにさうした事の心配をして、私にかう云つた。「彼れが静かに隠退して居られるのを、こんなに群集が押し寄せたんでは、ちと彼れを亂し、彼れを疲らしはしないでせうか。かうした歳になると、平和ほど嬉しく尊いものはないですからね。」

*Parva domus, magna quies* 賢者と云ふ賢者は、みんな斯う申してゐます。」

然しながら、此の復活の日以來恰も世人は彼れへ續けざまに、ミストラルへ五十年間に與へられたよりも、より多くの名譽を浴びせ掛けようとするものの如く、何々大學教授、何々委員、何々協會員、何々アカデミー員など、群集はいよ／＼多く、ますます騒々しく相次いでやつて來た。單純な、懇勤な一大臣も屬僚の一行を伴ふて來て、ファブルに眞摯な言葉を云つた。彼れは偉大なデユリニイ以來五十年、ファブルを訪づれた唯一の大臣だつた。

註一 一九一三年八月五日、大臣ジョゼフ・ティエリイ (Joseph Tierry) の訪問。

村の白砲がさうした訪問の序曲を奏し、セリニヤンとオランヂユとの音楽隊がこれに伴ふ。その度び老人は玄關から遠くない築山の上で、藁張りの椅子、若しくは平常彼れの好いてゐた腰掛へ掛けさせられる。彼れの頂は大きな新しいフェルト帽に蔽はれ、丁寧に梳かれた長い白髪は垂れ、軟らかい開いたカラーの下には、黒い絹のネクタイがぞんざいに結ばれ、胸の上につけられた赤い略綬は黒地の上に輝く。彼れはちつとして身動きもせず、ちつちやくなつて待ち、且つ聽く。然しながら、もう悟道に入つた、それでも何んとはなしに不安な此の晩年に於て、彼れはさうした何ものにも興味を覺ゆるではなく、親しい人達に向つて、よく自分は「珍らしい動物」なんだ、皆んなが話し、皆んなが見たがる「奇妙な動物」なんだと云ふのであつた。

えらく準備された挨拶に對して答へることは出來ず、彼れは黙つてゐるか、さもなくば泣くのであつた。そんな譯で、彼れは阿呆にでもなつたやうに思はれた。彼れを知らずに讚美してゐた多くの人達は、遠くから想像してゐた理想の姿が忽然として消え、そして幻滅の苦い味を味はうよりは寧ろ近寄つて見ない方がよいなどと考へた。

家に這入ると彼れは、シヤラツスやアンフオス・マルタンなどとしんみり打ち解けて、はじめて緩つくりするのであつた。彼れはこれらの純朴な、健全な、教養のある人達を非常に懐しんでゐた。彼等はまた誰れにも増して、「ざら／＼した不斷着、がつしりした地味な靴、太地の木綿のシヤツ——何よりも彼れの類ひなき心」を愛してゐた。

註一 Anfos Martin 始め小學教員で、後に視學官となつた人。

かうした讚美は最後に一九一三年の秋、大統領ポアンカレの訪問となつて現はれた。その朝、輝かしい南フランスの光りの中を、彼れは地方の古曲を奏する笛や太鼓の音と共に、花薫るメエヤアヌにミストラルへ敬意を表しに行つた。ミストラルがその靈妙な詩を以つて吾々の光りを失つた想像を照らし、晨の息吹のやうに新鮮な忘れることの出来ない幾多の節を以つて、吾々の想ひ出の中へミレイユ (Mireille) とカラランダル (Calendal) との不朽の姿を打ち起てて呉れたことを、彼れは全國民の名に依つて感謝するために行つたのである。

註一 一九一三年、十月十四日、大統領ポアンカレの訪問。

そして夕暮れ近く、何んと云ふ感動的な對照であらう、恰度陽も沈まうとする頃に、彼れは今度セリニヤンの偉大な隱遁者へ共和國の讚辭を齎さうとしてゐた。幾つかの綠門は、埃だらけな街道に跨つて、最後の夕陽に輝かされてゐた。軍隊は所々に配置せられ、街道に沿う土手は無數の群集によつて蔽はれてゐた。そして幾人かの憲兵は、アルマの凡ゆる隅々を偵察し、警戒してゐた。

彼れは樹の葉のテントの下に運ばれた。そして彼れの家族、甥、それから母が死んで幾許も経たず、尙ほ喪服を着けてゐた彼れの娘達はそのぐるりを取り巻いた。彼れの直ぐ傍らには、今彼れを介抱してゐた尼さんが付き添ふてゐた。

彼れの前には三色旗がなびく門の所まで、青々とした生垣に縁取られた路が、綺麗に搔かれて眞直に展べられてゐた。

突然、音楽が濕めやかな大氣の中に響いた。一行が現はれる。華やかに進んで来る。そして大統領は「微々たるものの中に偉大なるものを見せ、そして吾々に無限の感じを與へる」所の、此の崇高な百姓へ口早に言葉をかけた。

フアブルは無言のまゝ聽いてゐた。彼れの言葉に餘る感情を表はすものといへば、たゞ顎が痙攣

的に顛へ、しばたゞく險の赤い眼からは涙が溢れて、靜かに皺を傳ひ落ちる位のものだつた。彼れは腰掛から身を起して應へようとした。が、四方から差し出される手を握ることが出来た丈けである。重々しい沈黙が次いだ。そして次第に人の去つた庭は、夕べの薄明りと涼氣とに包まれた。

今になつては如何なる名聲も、彼れに不釣合ではないやうに思はれた。そして人々は尙ほ生きてゐる彼れを石に刻み、銅に鑄ることを考へた。實際多くの偉人は屢々數世紀を待つて始めて肖像を持ち、そして通行人にその天才若しくは徳を回想せしめる。然るにミストラルのそれは、既に誇らかにアルルの古代劇場に聳えてゐたではないか。それにしても今、ファブルの光榮を望んで止まない人々には、たゞ一つでは満足が出来ぬ。そして彫刻家の鑿は、やがてアヴィニヨン、オランヂユ、セリニヤン、及びサン・レオンに建てらるべき像を、或ひは始め或ひは終るために、互に熱烈な競争をしてゐた。彼れ自身はどうかと云へば、さうした凡ての異常な準備を、それとは定かならぬ好奇心と深い無關心とを以つて見てゐた。「わしの考へでは、これはまあ、お祭り騒ぎだね」——斯うフロンテニヤン市から美味い葡萄酒や上等の葡萄酒を送つて呉れた友人ボルドオヌへ書いてゐる。

註一「セリニヤンの市長は、わしのために半身像を建てる計畫中だとのことだ。恰度今、わしの家には彫

刻家シャルパンチエが來一ゐる。そしてアヴィニヨンの師範學校へ建てようと云ふ像を造つてゐる。わしの考へでは、これはまあ、お祭り騒ぎだね。皆んなはしたい放題なことをするがいゝ！ わしと來た日には、ますゝ老けた。もうお終ひだ！」（一九一三年、九月十五日、醫師ボルドオヌへの手紙）

戦争がぐんぐんと大股にやつて來て、凡ゆる斯うした過度の熱心を阻止した。そして老人は尙ほ幾らかの餘生を、再び聖い靜けさの中に楽しむことが出来た。

## 小秘密の後の大秘密

大嵐のやうな怖るべき戦争が、自然の面を認知の出来ないものとなしながら、遮二無二、道なき道押し分けて来た。そして、世界を司どる必然的な経済法則の一作用であるかの如く、彼れは今また猛威を逞しうする——「貧者が富者を妬む」やうな、また、人間の森林に「狼が潜む限り、モロツス犬が必要である」やうな、此の宏大な社会組織を左右するところの、あの本能の放たれた衝動の如く宿命的に——。

久しい以前から豫言せられ、豫期せられ、そして萬人を不安ならしめてゐたところの、あの中歐に蟠踞してゐる「掠奪者」の不斷の威嚇が、日に増し明瞭になつて、既に勇敢な蠅のセルビアをその網に引つかけてゐた。そして此の「掠奪者」は、ファブルがあんなにも屢々云つたやうに、ひたすら正當な所有者を惨殺し、その住所と、その仕事と、その富とを破壊することをのみ思ひ、世紀

の経験も教ふる所のない因習的な敵の前にあつてさへも、何んら不安を懐くことのない昆蟲のやうな、全く無關心な此の吾々をも將に襲はんとしてゐた。

世界を動搖させてゐた擾亂は、フアブルの住居さへも揺がした。彼の女婿、彼れの息子は戦線にゐた。此の後者が出發する時に涙を流すのを見たフアブルは、渾身に力を籠めて、その涙を拭へ、男兒として義務を果せ——と嚴命したのであつた。

休暇を得て、若しくは負傷して保養のために歸つて來る村の軍人に、彼れは何やかやと食するやうに訊ねた。彼れは釣り込まれるやうにして彼等の物語を聴き、彼等に葡萄酒をすゝめ、彼等を鼓舞し、彼等へドイツ人に對する彼れの憎惡を吹き込み、同時に彼れに充ち満ちてゐた無限の希望を彼等へ感染させた。實際彼れに取つてドイツ人は、考へ方なり表現の仕方なりの點で、彼れとは餘りに縁が遠く思はれて、その著作をドイツ語に翻譯させようとはしなかつたほどである。吾々の軍隊が戰つてゐるのは嘗に祖國の福祉のためのみではなくて、それはまた吾々の道德的解放、科學的獨立、彼れ自身も常に力を致して來た吾々の智的復活のためであることを、彼れは切實に感じてゐた。

然しながら、彼れは間もなくアグラエと尼さんとの懇ろな介抱に取り卷かれて、彼れの部屋に閉ぢ籠るやうになつた。何時もの小さい卓子の前に坐つて、彼れは尙ほも思索しようとする。あゝ！此の卓子はやがて彼れの宏大な刻苦精勵の形見、彼れの最後の證人となるものである。彼れは鼠色の羅紗の部屋衣を纏ひ、董色の天鵞絨の頭巾を被り、そして股の半ばあたりまでも届くメルトンのゲートルは、ぴつちりとぼたんをかけられてゐた。彼れを見違ひさせるやうな、斯うした異様な身装は、彼れの身邊を有らん限りの心盡くしを以つて取り卷く孫娘の思ひつきだつた。そして彼れは彼女の親切さ、惻發さ、快活さなどを極めて嬉しく思ふてゐた。彼女はまた彼れにパイプを詰め變へてやつたり、相變らず澤山來る手紙へ口述によつて返事を代書したり、また彼れの欲するまゝに福音書を読んでやつたりもした。キリストとエンマウスの弟子等との邂逅は、彼れが特に好いたエピソードの一つだつた。彼れの所謂「斧を振つて刻む使徒」なる聖ポオルの氣高い姿も「商賣の非凡な酒屋」のそれと共に、彼れに深い印象を與へてゐた。舊約全書の第一書もよく讀んで貰つた。特に創世記の始めの方などは、その整然たる壯麗さが、彼れを恍惚たらしめるのであつた。



さうかうしてゐる内に、彼れはどんなことをしても、ますます睡魔を打ち拂ふことが出来なくなつた。それが晝の大部分、彼れを抵抗の出来ないやうに襲ふやうになつた。私が何時もして来たやうに、それが最後となつたがノエルの日を訪ねた時、さうした不可抗の傾向と闘ふためにコーヒーを執ることをお奨めした。彼れはにこ／＼しながら、たゞかう答へただけである。

「山羊がコーヒーの葉を食つたら睡られなくなつて、しよつちゆう踊つてばかりゐたつてことだ。知つての通り、それがコーヒーの發見となつて、その結果素晴らしい富となつたのだが、それでは何かね、わしもその山羊みたいにびよん／＼跳ぶ見込みでもあるのかね。」

私は彼れの眼を覺まさせてやるために、爐に燃えてゐた焰から紙を振つたものへ火を點けて、彼れが絶えずそのまゝ消やして了ふパイプへ火を點けてやつた。と、彼れはかう思ひ耽つた。

「今でこそ此の火のことは誰れも何んとも思つてゐないが、いちらしい人類ユマニテがそれをものにして絶やさないために、どれほど永くかゝつたことであらう。それを思ふてみたことがあるかね。わしの子供の時分でさへも、村の媪さん達は毎朝隣から隣へ往つて、灰を被つてゐる火種を貰つて來、そ

して火をおこして爐を復活させてゐた。」

身體があんなに衰頹してゐたにも拘はらず、彼れの頭腦だけは依然として驚くべきほど明晰だつた。そして彼れには意味が取れなからうと思はれるやうな、端はたでこそ／＼する囁きをさへも、彼れはちやんと聞いてゐた。

再び五月の月になつた時、彼れはもう一度リラの花盛りなアルマをひと廻りしようと云つた。そこで人々は彼れを椅子車に乗せて、蜿りくねつた小徑を押して行つた。

前年の夏以來、もう、何んと云ふ變り方だ！ 幾許も経つてゐないのに、もう、様子がすつかり變つて了つて、彼れ自身にも見當がつかないほどではないか！ すさまじい勢ひの植物は、彼れが手入れをしなくなつてから、既に人間の事業を絶滅しようとしてゐた。特に日本の漆——あの邊またりかまはす蔓はびこる構にはうるしが花壇へ踏み込んで、所によつては四輪馬車さへ通れる廣い路をも襲ひ、今では到る所、たゞもう抜き足差し足の細い跡しか出來てゐないのだ。間もなく彼れを奪ひ去らうとしてゐる死の未だ到らない前に、先づ彼れの物が死んでゐた。

それにしても、死は秋の半ばまではやつて來なかつた。とは云へ、それまでに尿毒症の危機が數回、これが最後ではないかと氣遣はせた。とう／＼十月七日に極めて危険な危機が、完全な閉尿を伴つて、それが約四十八時間続いた。此の時からと云ふものは、彼れは屢々人事不省に陥つた。けれども醒めると元の明晰さを恢復して、彼れは妹と親しく語り合ふのだつた。十一日になつて、彼れはきつぱりと最後の苦悶をし出した。セリニヤンの牧師が謝罪の式を行つた時、彼れはもう意識を失つてゐた。それにしても牧師の強い聲を聞きつけ、彼れは昏睡から醒めて、その大きな眼を彼れへ向けた。牧師は彼れに聖膏禮を受けるかどうか、受けるならば、その徴しるしに握手をして下さいと云つた。此の瀕死の人は握手の手つきをした。だから彼れは、その昔ロデエの中學校で、授業料を拂ふために彌撒のお手傳ひをした頃以來、始めて立派な基督教信者となつて此の世を去つた。

それに彼れは生涯を通じて、誠意を以つて「最高理性」と接觸してゐたではないか。研究することとは、彼れにとつて、常に最上の祈禱であつた。そして彼れ自身の定義によると、科學は闇を拂ふ祈りの最も優れたものだつた。尙ほ彼れは、彼れの愛慕する詩人ベランヂエの「善良な神」を心から信じてゐた。

吾れは選ぶ、心優しき者を。

— Le Bon Dieu

また、彼れの心はその魂のやうに豊かであつて、惱めるものに對しても、貧しき者に對しても、榮えなきものに對しても——凡てに微笑み、凡てに開かれてゐた。よしんば信念によつて、生涯宗派に屬しない自由な教育を固執したに拘はらず、彼れは凡ての信仰に對して常に深い尊敬を拂つてゐた。セリニヤンの學校から信者の女教員等が追ひ拂はれた時、彼れは彼等を熱烈に辯護した一人である。彼れはまた、彼れの教區の非宗教的な小學校へ常に寄附をした。だから凡ゆる教會は彼れを己れのものとなし、彼れのために祈禱を捧げたやうな譯である。本當を云へば、彼れは信仰を持つてはゐなかつた。然しながら、彼れはさうした嚴肅なことに關し、冷淡も狐疑も許しはしなかつ

た。彼れの神と云ふ觀念は、科學的信念に基いてゐた。そして彼れが全自然の中に見てゐた所のものは、そのたしかな保證だつた。

彼れは莢蒾がまずみの花輪を以つて飾られた小さい鐵の寢臺へ横たへられた。彼れが絶えず被つてゐた古い黒のフェルト帽は、彼れの傍らに置かれた。そして兩手は黒檀の十字架の上に組まれた。それから彼れは、例の見榮えのしない客間に降ろされた。それは彼れを柩へ納めるために、燈明の輝く葬ひの間とされたのであつた。彼れは其處で葬式の時刻まで、ブルーエール、その他アルマの色々な草花をこき混ぜた花冠に取り巻かれ、顔はそのまゝ蔽はれずにゐた。さうしてゐる間、凡ての人は曾つて無かつたほど印象深く美しい此の顔の驚くべき清澄さと、異常な純潔さにつくづく見とれた。それは死ぬことのないと云はれる黄金時代の傳説の、あゝした禁慾主義者、若しくは聖者の身體のやうに、何時までもく變はるべからざるものやうに思はれた。

その頃戰爭の局面は、極めて氣遣はしいものだつた。吾々の敵はセルビアを侵略し、コンスタン

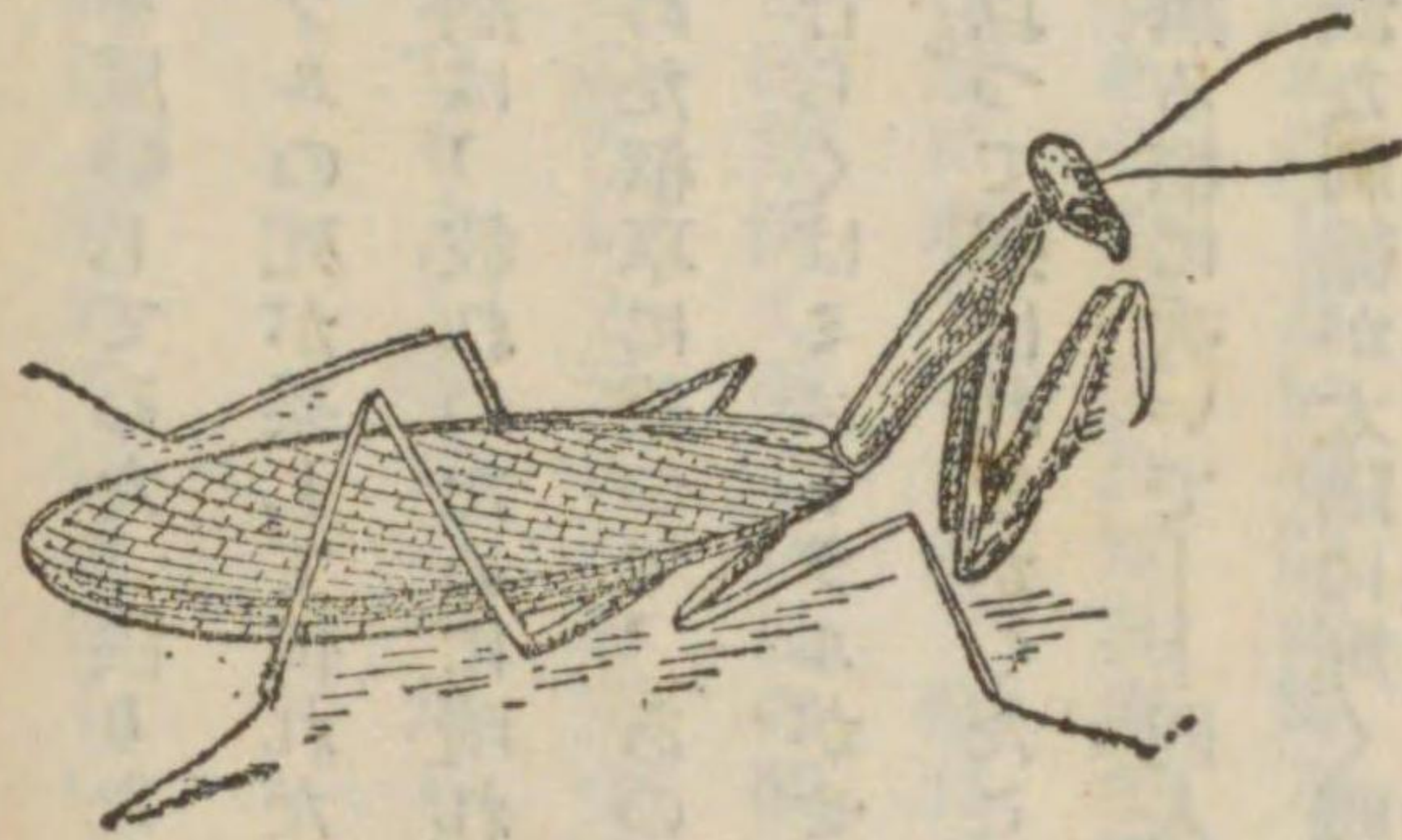
チノーブルへの道を威嚇してゐた。限りなき不安が凡ての人の心を悩ましてゐた。世界を擧げての擾亂の中で、ファブルの死が果して何れだけの重きをなしたのであるか。尠くも彼れが無類の通解者となつて來た自然は、彼れのために晴れやかな装ひをした。そして彼れが此の陰慘な時に於ても尙ほ家族の心を籠めた柩車に乗つて、あの懐かしいリラの路を去つたのは、實にイタリイ晴れの輝く日であつた。惜むらくはミストラルがせられたやうに、彼れもセリニヤンの青年中、尙ほ生き残つてゐる者の腕を以つて運ばれなかつたことである。

青葉と草花とに薫る柩に次いで——四人の村會議員が支へた弔布に次いで——共和國の政府を代表した知事の、立派な刺繡が太陽に輝く禮服に次いで——セリニヤンを繞る凡ゆる地方の歩くこととの出来るものは、すべて此の感慨深い葬列に加はつた。それが少時教會に立ち止つた。そして凡ゆる葬儀の美々しさが展開された。それから、柩は山に近く橄欖樹にとりまかれ、野生の花と昆蟲の囁きに充ちた小さい墓場へしづくくと辿つて行つた。

弔辭が十有餘もあつた。特にシヤラツスの別れの言葉は香かうのやうに——斷腸の祈りのやうに空へ昇つた。人々が入り代り立ち代り讚辭を述べてゐる間に、青い翅のばつたが幾つか柩の上へ來て止

つた。其處には既に、一匹のてんとう蟲が縫りついてゐた。乾いた草の香ばしい間を蟋蟀が縫ふて、行く／＼かさこそと音を立てた。と見ると、墓穴の黒い額の中の灰色な石の上には、信心深い一匹のお祈り螻蛄が止つてゐた。あゝ！かうして彼れに愛せられた凡ての蟲けらどもが、それ／＼藪の中、若しくは砂地の底からやつて来て、永遠の闇の彼方までも彼れの生涯の夢をはぐ／＼んで行くために、さながら彼れの跡を追はんとするもののやうだつた。

——(終り)——



大正十四年十月七日印刷  
大正十四年十月十五日發行  
昭和三年四月三日普及版

(定價金壹圓)

生一のルブアフ

譯者

椎名其二

發行者

足助素一

發行所

叢文閣

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地  
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地  
振替東京四二八八九番  
電話牛込二五七三番

印刷所

東京市神田區表神保町十番地  
文成社印刷所  
前田宗松

アンリ・ファブル著 昆虫記 (普及版) (1) 送料 八圓

アンリ・ファブル著 同 (2) 同

同 (3) 同

同 (4) 同

同 (5) 近刊

— 續刊 —

チエ・ヴェルグ著 フアブルの一生 (普及版) 送料 拾壹圓

ドウラージュ共著 進化学説 (普及版) 送料 八圓

ゴールドスマス 小泉 丹譯

544  
1281

